

千年の森便り No.175

2018.02.22

ちば千年の森をつくる会

<http://toyofusajima.html.xdomain.jp/>

代表 坂本文雄

sennennomori@hotmail.co.jp

活動の記録

2月18日(日) 晴

参加は秋元、新井通子、及川、久我夫妻、坂本、成沢、根本、福島、真鍋、松田、山口の12名。

青く澄みわたる空に、森の緑と銀色の梢が輝いていました。朝一番、白い息を吐きながら島の各地点に分かれて落葉期の相対照度調査。続いてシイタケ植菌、玉切りのチェーンソーの轟音、開孔する電動ドリルの快音、種駒を打ちこむハンマーの軽快な音が、森に響き渡るリズムに乗せられ、体も心も暖まりました。また手分けして北斜面の稀少種探し、1株見つかったコショウノキの仲間株探し、野鳥調査や動物撮影センサーカメラのメモリー交換など行いました。(真鍋)



朝から季節風が強く、豊英島へ向かう途中では車が煽られて蛇行しそうでした。寒さが厳しい上に皆さん年度末を控えて多忙と見え、参加はいつもより少な目でしたが、予定の照度調査とシイタケの駒打ちはどうにか終わらせることができました。

照度調査では吊り橋上が寒風の吹き曝しでしたから担当者探しに苦労するかと思っていたところ、若手の成沢さんが進んで引き受けてくれました。シイタケの駒打ちはコンコンと木槌の乾いた音がリズムカルに響いて、会員にとってはすっかり手慣れた作業となったようです。種駒の購入、道具類の準備などにお骨折り頂いた方に感謝します。尚、この作業中にヒヤリハットの事例がありましたので、反省をふまえて今後の作業には今まで以上気を引き締め、安全に徹したいと思います。(坂本)

○相対照度調査

朝イチの作業として、コナラ伐採地を中心に相対照度調査を行いました。お天気は快晴で、相対照度の調査には適したお天気ではありませんでしたが、参加会員の協力を得て、日射しを遮りながらなんとか調査を実施しました。測定時間は、10:00～11:00、調査人数は、橋の上1人、広場周辺3人、岬のヒメコマツ植栽地2人、コナラ伐採地5人、記録1人の計12人(全員参加)で、測定に使用した機器は、照度計8台、トランシーバー4台です。測定箇所は、コナラ伐採地が20地点(A-1～D-5)と、千年広場、コナラ更新林の苗畑、コナラ更新林のヒメコマツ植栽地、岬のヒメコマツ植栽地の計24地点で



す。相対照度は、開けた場所（橋の上）の照度を 100%とした時の、各地点の照度の比率（%）です。相対照度はバラツキが大きいことから、開けた場所と各地点で、同時に 4～5 回の照度測定を行い、得られた相対照度の平均値を各地点の相対照度としました。

表 1 にコナラ伐採地における今回の調査結果を、表 2 にコナラ伐採地を含めた全測定箇所の落葉期の相対照度の変化を示しました。コナラ伐採地の相対照度は、最大が 82.6%、最小が 53.7%、平均が 65.8%でした。測定箇所ごとに見ると、1 列と D 列が、ほかに比べてやや相対照度が低い傾向を示しました。これは、着葉期でも同様であり、伐採地周囲の樹木による被陰の影響と思われます。また、落葉期の相対照度については、岬ヒメコマツ、コナラ伐採地では昨年とほとんど変わりませんでした。千年広場やコナラ更新林で低くなる傾向が見られました。相対照度の低下については、周囲の樹木の成長（樹高成長、枝張り）による被陰が、その原因の一つと考えられます。（福島）

表 1 コナラ伐採地の相対照度 (%) (2018.2.18)

	1	2	3	4	5
A	67.2	70.8	69.4	82.6	81.8
B	64.9	67.0	66.2	71.9	75.3
C	58.8	63.5	61.4	62.7	61.9
D	53.7	58.1	56.8	60.7	60.8

表 2 島内 5 地点の落葉期の相対照度の変化

測定箇所	相対照度 (%)							
	落葉期	落葉期	落葉期	落葉期	落葉期	落葉期	落葉期	落葉期
	2010.2.14	2012.2.19	2013.2.17	2014.2.23	2015.2.15	2016.2.13	2017.2.19	2018.2.18
千年広場中央	65.6	61.7	58.4	63.9	71.5	60.3	52.4	38.5
コナラ更新林の苗畑	74.7	58.9	61.1	56.7	67.6	63.6	52.1	38.5
コナラ更新林ヒメコマツ		86.5	75.3	77.3	76.6	73.5	65.4	48.2
岬ヒメコマツ		86.8	54.6	44.4	66.9	65.3	70.8	68.8
コナラ伐採地				71.9	82.2	73.1	65.0	65.8

コナラ伐採地は、2015年2月以降20地点の平均値

〇シイタケ植菌；シイタケ原木の玉切り・駒打ち

1 月の活動で玉切りした原木に、今回、新たに玉切り作業を行い 40 本追加しました。

合計 86 本のコナラ原木への駒打ち作業は、10 名で行いました。この日の作業で、原木に電動ドリルで穴あけしたのち、駒打ち



し、日陰への仮伏せまで完了。シイタケの種菌は「にく丸」でおおよそ 2000 駒を植菌しました。

トントン♪、コンコン♪、トコトコン〜 複数人での駒打ちは、小気味良いリズムを森の中に響き渡らせていました (^)♪ 菌の活着を待ち、今後、本伏せを行う予定です。（成沢）

〇北斜面の植物調査

今年の冬はとても厳しい寒さが続いています。この豊英島でも同様です。60～80 cmほどのツララが崖にぶら下がっていました。斜面には霜柱があり視覚で寒さを確認することができました。この崖の下、東方向に前回確認したコセリバオウレンがあるはずでしたが、残念ながら見当たりません。見つけたのは、ミヤマウズラ 2 株とシカの糞です。シカの食害を受けたのでしょうか。危惧したことが起こっているような気がします。来年こそ花が見られるようにと、とりあえず周辺の落葉を払い、枯枝を除去しました。ここからさらに東側に移

動するとスハマソウの区域になります。1株のスハマソウにつぼみがついていました。もう1週間ほどで開花するのではと思いをはせました。(文・写真とも秋元)



崖のツララ



フレッシュなシカのフン



ミヤマウズラ



スハマソウの蕾

○コショウノキ

新井さんと秋元さんは、コショウノキを探索し、新たな個体を発見しました。先に見つけていた株が雌株で、昨年は結実していたことから、近くに別の個体(雄株)があると予想されていましたが、今回、予想どおりに別の個体(雄株かどうかは不明)が見つかりました。

なお、新たに見つかった個体に支柱を設置する際、周囲を探索したところ、さらに2本のコショウノキを発見し、島内のコショウノキは計4本になりました。

一方で、昨年結実していた個体(雌株)は、花を着けていたものの、雪の影響か幹が傾き枝も損傷した状態となっており、回復するかどうか心配な状況です。(福島)



4本目のコショウノキに支柱設置

コショウノキの解説(参考：千葉県植物誌、山溪ハンディ図鑑 4樹に咲く花)

コショウノキは、ジンチョウゲ科ジンチョウゲ属の常緑低木で、関東地方以西の本州太平洋岸、四国、九州、沖縄、朝鮮半島南部に分布しており、暖かい地方の植物です。千葉県では主に房総半島南部で見られます。葉は互生でやわらかな革質で、葉身は長さ4~16cm、幅1.5~4cmの長楕円形または倒披針形で全縁、表面には光沢があり、両面とも無毛です。雌雄は別株で、枝先に芳香のある白い花を数個着けます。花卉のように見える部分は萼筒で、先は4裂し外面には細かい毛が密生します。果実は、液果で直径8mmほどの球形、6月頃に赤く熟します。県評価は要保護となっています。豊英島では2017年3月に確認されました。(文・写真とも福島)



2017年3月19日



2017年6月25日



2018年2月18日

○青空にアセビの花、クロモジはほころび



アセビは花盛り(福島)



ヤブツバキの花(坂本)



ほころび始めたクロモジ(坂本)

○野鳥記録（メモの順）

トビ3 アカゲラ声（福島さんの情報） セグロセキレイ声 ハシブトガラ声 ヤマガラ囀り エナガ声 コゲラ声 ヒヨドリ声 カケス声

以上9種

今回はカモ類など水鳥の確認ができませんでした。バス釣りのボートが数隻、島の周辺を動き回っていたのが原因かも知れません。

センサーカメラにはシロハラの画像がありました。シロハラは大陸方面で繁殖し、越冬期に飛来する渡り鳥です。この時期は地上で落ち葉を掻き分けミミズなどの餌を探して歩きまわるので偶然写ったものと思います。（坂本）



シロハラ（センサーカメラ 1月28日）

○センサーカメラの画像から

動物としては野鳥のシロハラの他にイタチらしい後ろ姿、ニホンジカのみでした。

その他に雪景色の画像もありましたが、動物は写っていませんでした。

尚、来月からセンサーカメラの担当を及川さんをお願いします。カメラの設置場所などは及川さんのセンスに任せますので、何が写るか乞うご期待（坂本）



ニホンジカ（センサーカメラ 1月29日）

○センサーカメラのメンテナンス（引き継ぎ準備）

坂本さんの負荷分散を図るために、センサーカメラのメンテナンス、情報処理を今後及川にて担当する準備として、バッテリーおよびSDカードの交換作業に立ち会い・参加しました。

＜参加者＞坂本、及川（敬称略）

＜作業内容＞・3台のセンサーカメラの、センサー用及びカメラ用バッテリーとSDカードの交換
・1台、センサーとの連動不良により持ち帰り

センサーカメラに関する作業の引継ぎを行うべく、坂本さんの説明・指導の下、上記作業を行いました。『たかがバッテリーとメモリーの交換じゃないか、ちゃっちゃとやれば15分もあれば終わるだろう』と甘く考えていましたが、照度調査後の午前中の時間いっぱいを費やす難作業でした。

『坂本さんは今までよく文句も言わずにこんな非効率な作業を続けていたな』と感心すると同時に、『体よくはめられたんじゃないか？（笑）』という思いが交差する、不思議な事後感を覚える作業でした。作業を非効率にしている要因は以下の通りです。

1. センサーカメラ3台の購入時期がそれぞれ異なるため、使用部品及び操作方法に違いがある。今後のメンテナンスを考えると部品に共通性がないのは不安大。
2. 本来屋外使用が前提と思うが、驚いたことに防塵・防水仕様になっていない。このため、バッテリーパックの電極、スイッチなどに汚れの付着、さびによる接触不良と思われる動作不良が多発し、機嫌よく動くようになるまで着脱、切り替えを繰り返さざるを得ない。

その他、固定方法などを含め、センサーカメラの保護とメンテナンス性の向上を図っていきたいと思っています。センサーカメラをこんな風に養生して使っている、こんな保護用アクセサリーがある、など、情報をお持ちの方がいらっしゃいましたらご提供ください。（及川）

シイタケ栽培の今昔

シイタケの駒打に関連した話題の提供です。

今はスーパーマーケットに行けばシイタケを始め色々なキノコが何時でも買えるし、値段も手頃ですから、若い世代にとっては特別な感慨も無い、有り触れた食材の一つだと思います。

これは人工栽培が普及したお蔭で、それ以前は高級食材だったと言っても信じてもらえるでしょうか。

室町、鎌倉時代から自然採取のシイタケ乾燥品は国の重要な交易品で、庶民の食べ物では無かった筈です。

恐らくその当ても人工栽培の工夫はされていたと思いますが、確立された方法は無く、原木を日陰に置いて自然発生を待つだけ、又はシイタケの発生した木を削って原木の鉋目に振りかける等のお呪いのようなことしかできなかったそうです。従ってシイタケが出るか出ないか賭博みたいなもので、お金と手間暇を掛けても結果的には悲惨な目に遭う農家も多かったようです。

昭和初期に京都大学の森喜作博士が農家の惨状を救うべく研究の結果、菌糸の純粋培養に成功して、種駒を打ち込む方法を確立して以来、これが普及して今日に至って居るのです。

今回、植菌の品種のニクマルは森博士創設の森産業の品種ですから、私たちも恩恵を受けています。

もし、博士が人工栽培に成功していなければシイタケもマツタケ並みの値段だったかも知れません。（坂本）

お知らせ

○3月の活動日

3月18日曜日 9時30分 君津市自然休養村管理センターに集合、シカ個体数調査、ヒラタケ植菌、植物、野鳥調査、ヒメコマツ生長調査 など計画しています。

ヒラタケは、米ぬか、木屑に混ぜた菌糸をイヌシデにサンドイッチにします。実施要領は次頁の通り。イヌシデ原木玉切りのため、チェーンソーある方は持参ください。（チェーンソー作業に必要な服装準備の上）

○4月の活動日、年次総会開催日 3月下旬にお知らせします。

○18年度定例活動日 4月の年次総会で決定しお知らせします。

○18年度きのご観察会

夏の観察会は8月19日（日曜日）、秋の観察会は10月14日（日曜日）実施の方向で吹春講師と調整中。

ヒラタケ植菌・栽培 実施要領

1月の作業

原木の伐採——イヌシデを伐採し、枝をはらって寝かせておく。

3月の作業

植菌——長=15cmに玉切りして、ヒラタケ種菌、米ぬか、おがくず規定量を混ぜたものを、玉切りと同時に擦りこむ。

仮伏せ——上記の様に植菌したものは、3段程度に重ねて湿気を保つよう、ビニールシート（ブルーシート等）で覆いをする。

4月の作業

本伏せ——林内に間隔を空け、植菌部分を上にして、切り口が現れる様に地面に埋めススキ、ワラなどをかぶせ（落ち葉でも可）雨水が入るようにする。

8月の作業

養生と食害防止——保湿、直射日光の防止、高温を防ぐためと、シカの食害を防ぐため、寒冷紗で小屋がけをする。

11月～1月の作業

収穫——気候により収穫時期は変わるが、11月から12月の発生を期待します。

（松田）